

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 竹生 礼子
副査 花淵 馨也
副査 藤田 佐和
(外部審査員)
副査 平 典子



このたび 熊谷歌織氏 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

- 1 学位論文題目 肺がんサバイバーにおけるスティグマ経験のプロセス
- 2 論文要旨 すでに配布のとおり
- 3 学位論文審査の要旨

本研究は、日本人のがんサバイバーが経験するスティグマ、特に、致命的なイメージと喫煙行動に結びついた非難を受けやすい肺がんをもつ患者のスティグマ経験に着目し、スティグマががんサバイバーの生きづらさに関連している可能性を解明しようとする、貴重かつ難しいテーマを取り上げた論考である。がん治療が発展し、社会生活を送るがんサバイバーが増えるに伴いサバイバーシップの考え方が浸透してきている一方で、一般市民の中では肺がんを不治の病とし死と結びつけるイメージが強く残っていることから、がんサバイバーに対する支援が重要であるという問題意識から取り組んだ研究である。

本研究は、肺がんサバイバーが認識するスティグマ経験、スティグマにまつわる状況に対する感情や思考、それに基づく行動のプロセスを明らかにすることを目的としている。肺がんサバイバー17名に対して、半構成的面接によるインタビューを行い、友人や知人ががんや肺がんに関与していると感じた出来事・その時の自分の感情・考え、自分の態度や行動についての語りを、M-GTAの手法を用いて分析した質的記述研究である。結果、【命が侵食する空気の感知】に始まり、《がんに染められた自己像の生成》が起こるが、【スルー力の発動】をし【譲歩しながら生きる】に向かう。これに並行して【命が侵食する空気の感知】から相手との関りにおいて【規制線を張った対応】をするが、やがて【素顔を見せるシェルターの保持】へと至り、それが【譲歩しながら生きる】を支えたことを明らかにした。また、《がんに染められた自己像の生成》がコアカテゴリーであることを見出した。

本研究のオリジナリティは、当事者の語りのデータ分析に基づき、特にセルフスティグマに焦点を当てることで、これまで明らかになっていなかった、日常的な対人関係の中で肺がんサバイバーが経験しているスティグマの具体的な内容と、それに対する繊細で、柔軟な対応のプロセスを記述し、明らかにした点にある。また、本研究の結果に基づき、がんサバイバーに対する支援のあり方について重要な示唆が示されている。

データ収集・分析は、理論的基盤の中で緻密に進められており、説得力のある結果を出すことができています。

審査員より、今後検討すべき課題として、以下の3点の助言があった。①考察の中で《がんに染められた自己像の生成》【譲歩しながら生きる】ことの意味について、研究者自身の見解を示すこと、②本研究で明らかになった、肺がんサバイバーのスティグマ経験は、サバイバー自身のセルフスティグマであることをより強調し、深く記述すること、③カテゴリ・サブカテゴリのネーミングを今一度確認し、より洗練させた説明をすることである。

本研究の発展に向けた意見として、スティグマとは何であるかをより深く探求する研究にとりくむことへの期待が伝えられた。

4 最終試験の要旨

最終試験は、プレゼンテーション、質疑応答、博士論文審査基準による評価、審議というプロセスを経て行われた。論文内容のプレゼンテーションは、研究に至った経緯から結論に沿って非常にわかりやすいものであり、審査委員からの質疑に対する申請者の応答も適切であった。

審査の結果、本学位論文が新規性と独創性に富み、がん看護の実践に大きく貢献するものであり、今後の発展性も期待される優れた価値を有することを全審査委員が一致して認めた。

以上の結果 熊谷歌織氏 は、博士 (看護学) の学位を授与する資格が ある と判定する。
博士 (臨床福祉学) ない